TEDトークを教材としたルーブリック評価による 日本語プレゼンテーション教育

Presentation Education in Japanese by Rubric Evaluation Using TED Talks as an Educational Tool

中 釜 達 朗^{※1}
Tatsuro NAKAGAMA

市 川 隼 人^{※1}
Hayato ICHIKAWA

保 科 貴 亮^{※1}
Taka-aki HOSHINA

A presentation practice in Japanese by rubric evaluation using TED talks as an educational tool was performed. The practical objectives were the acquisition of (1) presentation skills and the abilities of (2) adequate information collecting, (3) planning and (4) cooperating. From the questionnaires for the students, almost all of them realized that all the objectives were achieved. Additionally, using two TED talks and reviewing using rubric and review sheets for groups and individuals were particularly effective for achieving the objectives (1), (1) and (3), respectively. The rubric evaluation results obtained from the presentation groups and the student members were both comparable to those obtained from teachers in charge of the practice.

Keywords : Industrial Education, Presentation, TED, Educational Tool, Rubric

キーワード : 工学教育, プレゼンテーション, TED, 教育教材, ルーブリック

1. はじめに

近年, 大学におけるプレゼンテーション教育の必要性が強く求められている¹⁾. 一方, TED (Technology Entertainment Design) 主催のカンファレンスにおけるプレゼンテーション (TEDトーク) は英語のプレゼンテーション教材として注目されている. このTEDトークは工学的内容も多く含み, 工学系大学生のためのプレゼンテーション教材として興味深い. しかしながら, 大学の初等教育では英語によるプレゼンテーションは難易度が高い場合がある. そこで, 本研究では将来の英語プレゼンテーション教育を視野に入れ, 大学初等教育においてTEDトークを教材とした日本語プレゼンテーション教育を試みた. さらにこの授業ではルーブリック評価²⁾を用い, TEDトークとともに教育効果を検証した. 日本大学生産工学部応用分子学科国際化学技術者コース (JABEEコース) で行われた2年次ゼミ (2学年, 前期) での実践結果を報告する.

2. 授業内容, 教材および方法

2.1 達成目標および取り組み

本科目の達成目標は以下のとおりであった.

- (1) プレゼンテーション技法を身につけ, 適切な (目的や聴衆の要求に応じた) プレゼンテーションを実際に行うことができる.

- (2) 目的に対して自ら適切な (正確かつ目的に沿った) 科学的情報を収集することができ, その情報を生かした実践ができる.

- (3) 授業で指示された時間内で計画的に課題に取り組み, 最終的に与えられた課題を克服することができる.

- (4) 協働するためのコミュニケーション能力を身につけ, 他者と協働して課題に取り組むことができる³⁾. これらの達成目標に到達するために, 本科目では以下の取り組みを試みた.

- (1) プレゼンテーションにおける基本的事項の理解およびテーマ選定題材としてのTEDトークの利用
- (2) ビデオレコーダーによるプレゼンテーションの撮影とGoogle Drive[®]による発表者との動画共有と視聴
- (3) 発表グループおよび個人用ルーブリックの設定
- (4) ルーブリックおよび振り返りシートを用いたグループ別および個人別「振り返り」の実施

2.2 授業で用いた主な教材および資料

2.2.1 TEDトーク

本科目では, 1) 履修者が興味を持てる科学的内容であること, 2) 基本的かつ分かりやすい発表構成であること, 3) 過度な発表態度ではなく, 話し方が日本語プレゼンテーションとして自然であることなどから以下の2つのTEDトークを教材として選択した.

TEDトーク①: 「有望な膵臓がん検査 - なんとティーンエイジャーが開発」⁴⁾

2014年8月20日受付

※1 日本大学生産工学部

プレゼンテーションの構成を説明する際に使用した。高校生の発表なので履修生の刺激となることも期待した。

TEDトーク②：「30歳は昔の20歳ではありません」⁵⁾

プレゼンテーションの構成を確認する演習例として使用した。また、人生における20歳代の生き方の重要性を説いている内容が履修生にとって有用であると判断し、プレゼンテーション作成の題材としても使用した。

2.2.2 ルーブリック

ルーブリック評価の導入は、成績評価の公平性、客観性および厳格性を増大させる効果が期待できる²⁾。本科目ではグループでの「振り返り」に発表全体の評価基準を示したルーブリック評価を、個人の「振り返り」に発表者個人の評価基準を示したルーブリックをそれぞれ用いた。グループでの「振り返り」を先に

うことにより履修者同士で評価基準を共有し、より客観的な自己評価を促すこととした。

本科目で用いた発表グループおよび個人用ルーブリックを表1および2に示す。まず、達成目標ごとに以下の評価項目を設定した。

達成目標(1)：(a)発表構成、(b)スライドデザイン、(c)発表姿勢、(d)発表時間および(e)情報の正確さ

達成目標(2)：(e)および(f)情報収集

達成目標(3)：(g)準備の計画性

達成目標(4)：(h)協働性

評価は内容の達成度に応じて4段階（A：「優」、B：「良」、C：「可」およびD：「不可」）とした。

2.2.3 振り返りシート

本科目の授業後半でルーブリック（表1および2）をもとに取り組みに関する振り返りを行った。その際、

表1 発表グループ用ルーブリック

達成目標	評価項目	A (優)	B (良)	C (可)	D (不可)
(1)	発表構成	スライドはわかりやすく論理的に並べられていた。次に何が述べられるか予想しやすかった。	大部分のスライドはわかりやすく論理的に並べられていたが、「場違い」なスライドがいくつかあった。	いくつかのスライドはわかりやすく論理的に並べられていたが、ほとんどのスライドは「場違い」であった。	すべてのスライドがわかりやすく論理的に並べられていなかった。
	スライドデザイン	文字は色、大きさ、字体などが工夫されていて実際に読みやすく、スライド間で統一されていて一体感があった。図表も見やすく、アニメーションや動画を使用した場合も非常に効果的であり、文字、図表とともにプレゼンテーション内容を引き立てていた。	文字は色、大きさ、字体などが工夫されており、ほとんどの図表も見やすかったが、一部、見にくいところがあった。アニメーションや動画を使用した場合も大部分が効果的であり、プレゼンテーション内容をわかりやすくしていた。	ほとんどの文字が読みにくく、また、スライド間の統一性に欠けた。図表に関心を惹きつける取り組みがなされていたとしてもプレゼンテーション内容への関連性が弱かった。アニメーションや動画を使用した場合も効果的ではなかった。	すべての文字が読めなかった。図表を解りやすくする工夫が見られず、プレゼンテーションとの関連性もなかった。
	発表姿勢	聴き手を常に意識して発表していた。聴き手のほうを向いてはっきりと大きく発声していた。全体を通じて聴き取りやすかった。	聴き手を意識しようという努力がかなり見られた。聴き手のほうを向いていたが声が小さいときがあったり、はっきりと大きく発声していたが聴き手のほうを向いていなかったりした。しかし、全体的には聴き取りやすかった。	聴き手を意識しようという努力がほとんど見られなかった。ほとんど聴き手のほうを向かず、手元の資料ばかり見ており、声も小さく、ほとんど聴き取れなかった。	聴き手を意識しようという努力が全く見られなかった。全く聴き手のほうを向かず、声も小さく、全く聴き取れなかった。
	発表時間	発表時間が指定時間内で終了した（12分～15分）。	発表時間が指定時間内より少し短かった（10分～12分）。	発表時間が指定時間内より少し長かった（15分～17分）。	発表時間が指定時間内よりかなり短かった（10分未満）か長く（17分以上）、発表会の進行に支障をきたした。
	情報の正確さ	スライドで信頼性のある引用先を記載するなどスライド上の情報が正確であり、発言でも信頼性の高い他者の意見と自分の意見を区別するなど正確な情報を聴き手に伝えていた。スライドや発言には聴き手に伝えたい情報がすべて含まれており、無駄な情報や誤解を生む情報がなかった。	一部のスライドで引用先を明らかにしていない情報があつたり、信頼性に乏しい引用先があつたりした。また、誤解を生むような発言も一部あつたが、概ね正確な情報を聴き手に提供していた。スライドや発言に伝えたい必要な情報はほとんど入っていたが、いくつか不要な情報や誤解を招く情報もあつた。	スライド上で情報の引用先がなく、またスライドや発言内容にかなり不正確な情報があつた。スライドや発言には聴き手に伝えたい情報が入っていたが、一部に必要な情報が欠けていた。	スライドや発言内容が全くわからなかった。明らかに間違っている情報があつた。スライド上で情報の引用先が全くなく、かつ発言内容も正確性を欠いていた。
(2)	情報収集	スライド作成に必要な情報だけではなく、プレゼンテーションのテーマをより深く理解するための情報、質疑応答にも対応できるような情報などを正確性の高い情報源から収集した。	主にスライド作成に必要な情報を正確性の高い情報源から収集しようとした。	情報源の正確性はあまり考えずに主にスライド作成に必要な情報を収集しようとしたが、一部で情報が不足してスライド作成に支障をきたした。	情報源の正確性を全く考えずに情報収集し、かつ得た情報量もプレゼンテーションを行うに当たり不十分であった。
(3)	計画性	最初の段階で準備計画を立て、その計画通りに準備を行って授業時間内でプレゼンテーションを完成した。	最初の段階である程度準備計画を立て、途中、計画を修正しながらほとんど授業時間内でプレゼンテーションを完成した。	最初の段階でほとんど準備計画を立てず、授業時間外の時間をかなり使いながら成り行き任せで準備を行ってプレゼンテーションを完成した。	最初の段階で全く準備計画を立てず、授業時間外の時間もかなり使ったがプレゼンテーションは完成しなかった。
(4)	協働性	話し合いや電子メール、あるいはSNSなど状況に応じたコミュニケーション手段により、各自の要望や得意分野を生かした作業分担を行い、一部の人が負担がかかることなく協力してスライドを完成させた。	話し合いや電子メール、あるいはSNSなど状況に応じたコミュニケーション手段により、一部が要望どおりではなく、または得意分野ではなかったが作業分担を行い、一部の人が負担がかかる場面はあったが概ね協力してスライドを完成させた。	話し合いや電子メール、あるいはSNSなどのコミュニケーション手段により、各自が要望どおりでなく、かつ苦手な内容ではあったが作業分担を行った。ほとんど一部の人がやってもいい面はあるがスライドを完成させた。	話し合いやSNSなどのコミュニケーション手段をとらずに作業分担を一切せず、一部の人がスライドを発表できる形にした。

表2 個人用ループリック

達成目標	評価項目	A (優)	B (良)	C (可)	D (不可)
(1)	発表構成	前後の関連性を意識し、全体の流れに沿ったスライドを自分で作成できた。	割り当てられた内容に関するスライドを自分で作成できたが、全体の流れをあまり意識しなかった。	全体の流れを意識してスライドを作成しようとしたが、自分で作成できなかった。	全体の内容を意識せず、かつ割り当てられた内容のスライドを自分で作成できなかった。
	スライドデザイン	文字の色、大きさや字体、図表の文字の大きさなどを工夫して実際に見やすいスライドを作成できた。あるいは、プレゼンテーションを引き立たせるアニメーションや動画を使用した。	文字の色、大きさや字体、図表の文字の大きさなどを工夫したが、一部、見にくいところがあった。あるいは、流れに沿ったアニメーションや動画を使用した。プレゼンテーション内容を引き立たせるほどではなかった。	文字の色、大きさや字体、図表の文字の大きさなどを工夫しようとしたが、ほとんどが見にくかった。あるいは、アニメーションや動画を使用した。全体の流れから浮いてしまった。	文字の色、大きさや字体、図表の文字の大きさなどを工夫せず、すべてが見にくかった。
	発表姿勢	聴き手を常に意識して発表できた。聴き手のほうを向いてははっきりと大きく発声できた。	聴き手を意識しようという努力をしたが、聴き手のほうを向いても声が小さいときがあったり、はっきりと大きく発声していても聴き手のほうを向いていなかったりした。	聴き手を意識しようという努力をほとんどしなかった。ほとんど聴き手のほうを向かず手元の資料ばかり見て発表し、声も小さかった。	聴き手を意識しようという努力を全くしなかった。全く聴き手のほうを向かず、声も小さかった。
	発表時間	プレゼンテーション全体から割り当てられた時間で発表できた(例えば1分程度)。	プレゼンテーション全体から割り当てられた時間より少し短かった(例えば30秒～1分)。	プレゼンテーション全体から割り当てられた時間より少し長かった(例えば1～2分)。	プレゼンテーション全体から割り当てられた時間よりよりかなり短かった(30秒未満)か長くなり(2分以上)、グループ発表時間に支障をきたした。
	情報の正確さ	信頼性のある引用先を記載するなどスライド上の情報が正確であり、発言(発表や質疑応答)でも信頼性の高い他者の意見と自分の意見を区別するなど正確な情報を聞き手に伝えることができた。スライドや発言に聴き手に伝えたい情報をすべて含めることができ、無駄な情報や誤解を生む情報はなかった。	一部のスライドで引用先を明らかにしていない情報があったり、信頼性に乏しい引用先があったりした。また、誤解を生むような発言も一部あったが、概ね正確な情報を聴き手に提供できた。スライドや発言に伝えたい必要な情報はほとんど入っていたが、いくつか不要な情報や誤解を招く情報もあった。	スライド上で情報の引用先がなく、またスライドや発言内容にかなり不正確な情報があった。スライドや発言には聴き手に伝えたい情報が入っていたが、一部に必要な情報が欠けていた。	スライドや発言内容の真偽が全くわからなかった。明らかに間違っている情報があったかも知れない。スライド上で情報の引用先が全くなく、かつ発言内容も正確かどうかわからなかった。
(2)	情報収集	スライド作成に必要な情報だけではなく、プレゼンテーションのテーマをより深く理解するための情報、質疑応答にも対応できるような情報などを正確性の高い情報源から収集できた。	主にスライド作成に必要な情報を正確性の高い情報源から収集しようとした。	情報源の正確性はあまり考えずに主にスライド作成に必要な情報を収集しようとしたが、一部で情報が不足したり、不正確な情報であることが発覚したりしてスライド作成に支障をきたした。	情報源の正確性を全く考えずに情報収集し、かつ得た情報量もプレゼンテーションを行うにあたり不十分であった。
(3)	計画性	グループ内の方針に沿って最初の段階で準備計画を立て、その計画通りに準備を行ってスライドを作成し、発表練習できた。	グループ内の方針に沿って最初の段階である程度準備計画を立て、途中、計画を修正しながらスライドを作成し、発表練習できた。	最初の段階でほとんど準備計画を立てず、成り行き任せで準備を行ってスライドを作成できたが、発表練習はできなかった。	最初の段階で全く準備計画を立てず、準備をしたがスライドを作成できず、発表練習もできなかった。
(4)	協働性	話し合いや電子メール、あるいはSNSなどのコミュニケーション手段により、自分の要望や得意分野などを発言し、他のグループメンバーと自分の要望や得意分野のバランスなどを考えて作業を行った。うまくいかない人に対して助言や作業補助をしながらプレゼンテーション全体を完成させることができた。	話し合いや電子メール、あるいはSNSなどのコミュニケーション手段により、自分の要望や得意分野などをうまく発言できなかったが、他のグループメンバーと自分の要望や得意分野のバランスなどを考えて作業を行った。うまくいかない人に対して助言や作業補助をする余裕はなかったがプレゼンテーション全体を完成させることができた。	話し合いや電子メール、あるいはSNSなどのコミュニケーション手段により、自分の要望や得意分野などをうまく発言できず、他のグループメンバーと自分の要望や得意分野のバランスなどを考える余裕もなく作業を行った。うまくいかなかったので助言や作業補助などを受け、プレゼンテーション全体を完成させることができた。	話し合いやSNSなどのコミュニケーション手段をとらずに自分勝手に作業を行った。他のグループメンバーに頼ってグループとして発表できる形にした。

1)別紙「振り返りにおける評価基準について」に記載されている以下の8項目について、**グループとして** A～Dのどの評価に当てはまるかを**グループで討議**し、該当するアルファベット(A～D)に○をつけなさい。

2)「A」評価の場合はこの評価に相当する取り組みができた要因を、「B」～「D」評価の場合はこの評価になった要因と改善点を**グループで討議**し、まとめて記載しなさい。

(1)発表構成(達成目標1) **自己評価: A B C D**

要因および改善点:

図1 グループ用振り返りシートの一部

評価項目ごとの自己評価およびその評価になった要因や改善点を履修生に記入させるために振り返りシートを作成した。その一部を図1に示す。評価項目（8項目）ごとにAからDのどの評価に当てはまるかを選び、○をつけるようにした。また、各評価になった要因と改善点を記入する欄を設けた。

2.3 授業方法

第1回授業でガイダンスを行った後、以下のように授業を進行した。

2.3.1 第2回から第5回授業

各授業（90分）ではTEDトークを通じて構成や話し方などを修得し、グループプレゼンテーションを経験することを目的とした。授業の流れを図2に示す。第2回授業では重要箇所を「穴埋め」にしてあるスライドのハンドアウト（スライド4枚／A4横版）を配布し、液晶プロジェクターを用いて説明した（図3）。

まず、TEDトーク①を視聴した後、プレゼンテーションの基本構成を説明し、プレゼンテーション①の発表構成について解説した（図3）。続いて、TEDトーク②の構成について考えさせる問題（選択式）および「充実した30代以降の人生を送る上でどのような大学生活を送ればよいと思いますか。自分の考えを述べなさい。」という記述式問題を演習として行った。第3回授業は演習を解説した後に、「穴埋め」ハンドアウトと液晶プロジェクターを用いてプレゼンテーションの構成やストーリーのイメージおよび話し方などについて説明した。説明後、「10年後の自分たちに向けて大学時代にやっておくべきこと」という演習でグループプレゼンテーション（7、8分程度）をつくる課題を与えた。発表グループ分け（3人8組、2人1組、計9組）を行った後、前回授業の課題返却とスライドごとにタイトルが記載されているPowerPointのワークシートを配布した。第4回授業でグループごとにワークシートを利用したスライド作成および発表練習を行い、第5回授業で発表を行った。発表はグループごと

図2 授業の流れ（第2回から第5回）

に動画を撮影し、Google Drive®にアップロードして発表者に視聴できるようにして「振り返り」ができるようにした。また、教員のコメントもGoogle Drive®を通じて送付した。

2.3.2 第6回から第15回授業

第6回から13回授業（各90分、図4）では発表グループメンバーを変え、テーマ設定からプレゼンテーション実施までの過程を履修生自身で行った。第6回授業ではスケジュールの説明とともに科学的内容のTEDトークを羅列したTEDリストを配布した。このTEDリスト中のプレゼンテーションから1つ題材を選び、作業分担後に新たに内容について調査して15分のプレゼンテーションを作成することを指示した。この際、作成するプレゼンテーションはTEDトークの「和訳」ではなく、あくまで調査した結果をまとめることを指示した。第7回授業で各自調査を行い、第8および9回授業でスライド作成を行った。授業後、作成したファイルをメール添付で提出させた。第10および11回授業で発表練習およびスライドの手直しを行い、第12および13回授業で発表会を行った。発表はグループごとに動画を撮影し、Google Drive®にアップロードして発表者のみ視聴できるようにした。

第14および15回授業ではグループおよび個人単位で「振り返り」を行った。第14回目授業では発表グループ用ループリックおよび振り返りシートを各グループに配布し、撮影動画を視聴しながら振り返りシートに所定事項を記入させ、提出させた。第15回授業では個人

図3 「穴埋め」ハンドアウト（上）および液晶プロジェクター（下）のスライド例

図4 授業の流れ（第6回から第15回）

用ループリックおよび振り返りシートを各履修生に配布して所定事項を記入，提出させた．併せてアンケートの記入および提出を行った．担当した3人の教員もループリックに沿ってグループおよび個人の評価を行った．

3. 結果および考察

3.1 選択したプレゼンテーションテーマ

第6回授業において，各グループが題材として選択したTEDトークは以下のとおりであった．

- 「自己修復能力をもったアスファルト」
- 「GPSをどうやって騙すか」
- 「もし車が話せたら事故は避けられる」
- 「世界を変える4Dプリンティング」
- 「宇宙はひとつしか存在しないのか？」
- 「なぜグーグル・グラスなのか？」
- 「クモの糸の壮麗さ」
- 「ルカ・トゥリンが語る香りの科学」
- 「いかにして巨大イカを見つけたか」

選択したTEDトークは工学系学生にとって興味深い内容であり，今後，プレゼンテーション用教材として有効であると考えられる．

3.2 ループリック評価

本科目における評価者と評価対象との関係を図5に示す．以下，4種類の評価結果をデータとして比較した．

- (1) グループ振り返り（図4）において，各発表グループが発表グループ用ループリック（表1）を用いて自らのグループ発表を評価した結果（G/G）
- (2) 個人振り返り（図4）において，各発表者が個人用ループリック（表2）を用いて自らの発表部分のみを評価した結果（P/P）
- (3) 教員が発表グループ用ループリックを用いてグループ発表ごとに評価した結果（Ts/G）

図5 本科目における評価者と評価対象との関係

表3 評価の一致数（ $n = 208^*$ ）

比較対象	一致	1段階違い	2段階違い
Ts/G-Ts/P	140 (67.3%)	63 (30.3%)	5 (2.4%)
G/G-P/P	137 (65.9%)	64 (30.8%)	7 (3.3%)
Ts/G-G/G	126 (60.6%)	82 (39.4%)	0 (0.0%)
Ts/P-P/P	120 (57.7%)	77 (37.0%)	11 (5.3%)

*8評価項目×26名

- (4) 教員が個人用ループリックを用いて発表者ごとに評価した結果（Ts/P）

データ数はTs/PおよびP/Pが各208（8評価項目×26名），G/GおよびTs/Gが各72（8評価項目×9発表グループ）である．解析に際してはG/GおよびTs/Gのデータをグループに所属する学生に割り当て，データ数を208に統一した．まず，各評価群（G/G，Ts/G，P/PおよびTs/P）間で評価（A，B，CおよびD）の一致度を検証した（表3）．評価者が同じ（Ts/G-Ts/P）あるいはグループの一員（G/G-P/P）である場合は比較的一致度が高かったが，異なる（Ts/G-G/GおよびTs/P-P/P）場合もほぼ同じ割合（6割程度）で一致した．不一致な場合もほとんど「1段階違い」であった．

次に，A，B，CおよびD評価をそれぞれ「3点」「2点」「1点」および「0点」とし，各評価群の評価項目ごとの平均点を比較した（表4）．

各評価間では特に差異は認められなかったが，評価科目別に見てみると（g）計画性についてはどの評価も低かった．これは，評価基準が授業時間内での作業を前提にしていたことによるものと考えられる．

今回は授業後半でループリック評価を行ったため，履修者自身が授業内で改善結果を検証する機会を持てなかった．授業前半（図2）からループリック評価を

表4 評価項目ごとの評価平均点

評価項目	G/G	Ts/G	P/P	Ts/P
(a) 発表構成	2.4±0.5	2.4±0.5	2.2±0.6	2.4±0.6
(b) スライドデザイン	2.2±0.7	2.2±0.4	2.1±0.5	2.2±0.7
(c) 発表姿勢	1.7±0.5	2.3±0.5	1.7±0.5	2.0±0.6
(d) 発表時間	2.7±0.7	2.5±0.7	2.2±1.0	2.5±0.6
(e) 情報の正確さ	2.2±0.4	2.3±0.5	2.0±0.6	2.2±0.7
(f) 情報収集	2.3±0.5	2.0±0.4	2.1±0.5	1.8±0.6
(g) 計画性	1.6±0.5	1.7±0.5	1.8±0.5	1.8±0.5
(h) 協働性	2.7±0.5	2.2±0.4	2.5±0.5	2.4±0.6
（全体）	2.2±0.6	2.2±0.6	2.0±0.6	2.2±0.7

表5 各達成目標に対する到達度の自己評価

選択項目\達成目標	(1)プレゼン技法	(2)情報収集	(3)計画性	(4)協働性
「できた」	1 (3.8%)	5 (19.2%)	3 (11.5%)	16 (61.5%)
「ほぼできた」	21 (80.8%)	21 (80.8%)	19 (73.1%)	9 (34.6%)
「あまりできなかった」	4 (15.4%)	0 (0.0%)	4 (15.4%)	1 (3.8%)
「全くできなかった」	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表6 達成目標到達に対する各取り組みの有用性評価

選択項目\取り組み	(1)TEDトーク	(2)撮影と視聴	(3)ループリック	(4)振り返り
「非常に役に立った」	11 (42.3%)	6 (23.1%)	3 (11.5%)	4 (15.4%)
「役に立った」	14 (53.8%)	20 (76.9%)	22 (84.6%)	20 (76.9%)
「あまり役にたたなかった」	1 (3.8%)	0 (0.0%)	1 (3.8%)	1 (3.8%)
「全く役にたたなかった」	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)

表7 各達成目標に対する各取り組みの有用性評価

達成目標\取り組み	(1)TEDトーク	(2)撮影と視聴	(3)ループリック	(4)振り返り
(1)プレゼン技法	18 (69.2%)	19 (73.1%)	14 (53.8%)	16 (61.5%)
(2)情報収集	11 (42.3%)	6 (23.1%)	7 (26.9%)	8 (30.8%)
(3)計画性	1 (3.8%)	5 (19.2%)	14 (53.8%)	14 (53.8%)
(4)協働性	0 (0.0%)	4 (15.4%)	7 (26.9%)	7 (26.9%)

用いることにより、科目内改善が自覚できる内容となると考える。

3.3 授業評価アンケート

アンケートは記名式で行い、26名の回答を得た。「総合的に判断してこの授業は意義のあるものでしたか」という問いに対するアンケート（5者選択）で回答結果は以下のとおりであった。

「強くそう思う」：13名（50.0%）

「そう思う」：12名（46.2%）

「どちらとも言えない」：0名（0.0%）

「そう思わない」：1名（3.8%）

「全くそう思わない」：0名（0.0%）

以上の結果から、ほとんどの履修生が本科目の意義を認めていることがわかった。「そう思わない」を選択した学生に関しては、振り返りシートから協働作業に関して負担が大きかったことが推察された。一方、各達成目標について到達度を自己評価するアンケート（4者選択）では表5のような結果となり、すべての達成目標に対してほぼ到達した実感があることがわかった。

「各取り組みが達成目標到達に対して役立ったか」という問いに対するアンケート（4者選択）結果は表6のとおりであり、履修生はすべての取り組みに対して有用性を感じていることがわかった。

「どの達成目標に役立ったか」については、取り組み(1)および(2)については達成目標(1)に、取り組み(3)および(4)については達成目標(1)および(3)にそれぞれ有用であったとの回答が50%を超えた（表7）。達成目標(2)および(4)についてはいずれの取り組みも低い評価となったが、表5の結果からプレゼンテーション教育自体が情報収集や協働性の意識につながったと推察される。

4. おわりに

TEDトークを教材とし、ループリック評価により日本語のプレゼンテーション教育を行った結果を報告した。TEDトークは日本語のプレゼンテーション教育にも有用であり、グループ別、個人別ループリック評価は履修生のより深い「振り返り」を可能にしたと考えられる。今回のループリック評価は評価者に関わらず一定の評価ができたことから、履修生間でプレゼンテーションを相互評価して成績に反映させることも可能である。

今後、ループリックをさらにブラッシュアップする必要があるが、本授業法が工学系学生の日本語および英語プレゼンテーション教育に貢献できることを期待する。

参考文献

- 1) 文部科学省：大学における社会的・職業的自立に関する指導等(キャリアガイダンス)の実施について、中央教育審議会、2009年12月15日、Webページ、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1288248.htm
- 2) 沖 裕貴：大学におけるループリック評価導入の実際、立命館高等教育研究、14、pp.71-90、2014
- 3) 学習・教育到達目標設定法とその達成度評価法、JABEE-日工教共催「国際的に通用する技術者教育ワークショップシリーズ 第1回」、2012年12月8日、Webページ、www.jabee.org/public_doc/download/?docid=30、参照日：2014-8-7
- 4) ジャック・アンドレイカ：有望な膵臓がん検査－なんとティーンエイジャーが開発、Webページ、http://www.ted.com/talks/jack_andraka_a_promising_test_for_pancreatic_cancer_from_a_teenager?language=ja、参照日：2014-8-7
- 5) メグ・ジェイ：30歳は昔の20歳ではありません、Webページ、http://www.ted.com/talks/meg_jay_why_30_is_not_the_new_20?language=ja、参照日：2014-8-7

著者紹介

中釜 達朗

学歴 東京都立大学工学研究科修士課程修了（応用化学専攻）

現職 日本大学・教授（生産工学部応用分子化学科）

学位 博士（工学）

専門 分析化学、機器分析化学

所属学協会 日本分析化学会、アメリカ化学会、日本工学教育協会など